

横たわりて天を仰ぐ

John Donne, *Devotions upon Emergent Occasions* における身体の姿勢

奥西豊子

はじめに

ジョン・ダン (John Donne. 1572-1631) は、セント・ポール大聖堂の司祭であった 1623 年の冬に、おそらく腸チフスにより重篤な容体となった。この病の体験は、回復直後の 1624 年初頭に出版された『危篤時の祈り』(*Devotions upon Emergent Occasions*) に反映されている。17 世紀の祈祷文学 (devotional literature) に属すと考えられるこの著作は、各 Devotion が、“Meditation” “Expostulation” “Prayer” で構成されており、瞑想録、病床の祈祷の手引き書、霊的自伝など、様々なジャンルの要素が絡み合う作品である。

多くの批評家たちが指摘するように、ダンは『危篤時の祈り』において、17 世紀当時の病の理解に則り、発熱や発疹などの病の症状に、自らの罪と神による救いのしるしを見出そうとした。本発表は、病の症状に焦点を合わせた従来の研究と異なり、病による身体の「姿勢」の変化に着目し、『危篤時の祈り』における、姿勢の変化と信仰心の回復の関係を読み解きたい。

1. 直立から横臥へ

『危篤時の祈り』は、病気の最初の兆候から、症状の悪化、回復までを、順を追って瞑想していく。体に変調をきたし、病の床に臥す段階である Devotion 3 において、横たわるダンは、かつては当たり前であった「立つこと」に思いをはせる。

Wee attribute but one priviledge and advantage to Mans body, above other moving creatures, that he is not as others, groveling, but of an erect, of an upright form, naturally built, & disposed to the contemplation of *Heaven*. Indeed it is a thankfull forme, and recompences that *soule*, which gives it, with carrying that *soule* so many foot higher, towards *heaven*. (Meditation 3: 14-15)

ダンは、人間の直立姿勢は、頭部を身体部位の中でも最も天に近づけ、人間が天を向くことを可能にし、魂が神のいる天を見ること、つまり観想を可能にすると論じる。

しかし、病により横たわる過程で、天に最も近いはずの頭は、身体的に最も低い足と同じ位置にまで貶められる (Meditation 3: 15)。これは、直立の姿勢、つまり神から与えられた生来的な身体の「特権」が損なわれるだけでなく、人間の魂の特権も損なわれる事態に他ならない。

観想に向かう身体的な特権を失ったまま死ぬことを、病人は恐れ、“Miserable, and, (though common to all) inhuman posture, where I must practise my lying in the grave, by lying still, and not practise my Resurrection, by rising any more.” (Meditation 3: 16) と述べる。ダンは、床に横たわる姿勢を、「非人間的」であり死者の似姿であるという。回復して床から起き上がる希望がもてない時、ベッドに横たわることは彼にとって復活のない死の予行演習なのだ。

2. 横臥から再び直立へ

ダンは、神が与えた病により死を覚悟する病人と、神の意志により死にゆく運命を辿った神の子との間に、アナロジーを見出す (Expostulation 3: 17)。その際にダンは、イエスが大地に横たわり地獄に降ったという、下降の動きに注目している。ダンは『危篤時の祈り』の最初の Devotion 「最初の病の兆候」 (Expostulation 1: 9) で、地獄への下降を体験している。病の初期から、天から最も遠いところへ落ちることを、イエスが地獄へ下ることと重ね合わせることで、病人が従順に病の床に臥すことが、かえって後の上昇の礎となる構図が提示されている (McDuffie 120)。さらに病人は、回復期の始まりの Devotion 21 の副題で、自身をラザロとも重ね合わせる (110)。ダンにとって、回復しベッドから起き上がることは、まさに死の床からの生還であり、神が与えた復活のしるしであるのだ。

Frost、岡田や竹永らが指摘してきたように、1623 年の大病からの身体的回復は、現世で魂があるべき姿を取り戻すことと、最後の審判の日に身体と魂が共に復活することの証として、ダンに神の救いを確信させた。Devotion 21 で、ダンは、病床から起き上がることは、病からの回復だけでなく、直立という身体的な特権と、魂があるべき健やかな有りようを取り戻すこ

とをも意味していると述べている (Expostulation 21: 112)。しかし、病から回復して再び「立ち上がった」状態は、必ずしも長続きするとは限らない。

3. 直立の不安定さ、横臥の安定性

身体が回復に向かい始めると、『危篤時の祈り』最後の Devotion 23 のタイトルが端的に示すように、病の再発への危惧が繰り返し描かれる。直立姿勢は、もはや天への近さを担保せず、二本足で立つ不安定さにより、再び天から遠ざかる危険のある姿勢なのだ (Meditation 21: 110)。さらに、立ち上がった病人には、倒れた際に、病床よりもさらに低いところまで一気に沈み込む危険さえある (Meditation 21: 111)。ダンは、最低の状態と思われた横たわる姿勢の方が、立っている体勢よりもかえって安全であったという皮肉な現実を悟ることになるのだ。

Clement は、近代初期のキリスト教の“humility”「謙虚さ」の概念について考察した研究で、ダンの大病後の 1624 年頃の説教と『危篤時の祈り』を取り上げ、神が愛により与える“humiliation”「屈辱的な体験」、つまり病気により苦しい惨めな思いをすることを、自ら受け入れ、その結果“humility”をもつに至る過程が記されていると論じている (58)。

Clement や Pender の論考は、ダンが病により被った身体的苦痛を考察の対象とするが、本発表では、横たわる病人の「非人間的」姿勢、つまり、立つという人間の特権を奪われることもまた、『危篤時の祈り』全体を貫く“humiliation”の体験であると主張したい。なぜなら、身体的ポジションの変化、つまり、頭の高さが低められ、死者の状態にまで貶められた、病床に横たわった体験こそが、ダンに“humility”をもたらしたからだ。

これこそが、ダンが神に対し“if I rise againe, thou wilt bee my recompence, all the dayes of my life, in making the memory of this sicknes beneficiall to me” (Expostulation 3: 17) と訴えかけるゆえんだ。身体を低く伏すことで心に生じた謙虚さを、「立ちあがった」が最後、人は忘れる危険があるのだ。本書の出版にあたり付された、チャールズ 1 世への献辞の中で、ダンが『危篤時の祈り』を“*This Image of my Humiliation*” (3) と呼んでいる。ダンが回復直後に本書を出版したのは、Clement も指摘するように (66)、再び倒れることへの危機意識から、神による強制的な“humiliation”の体験を風化させないようにと考えたためといえるだろう。

以上から、『危篤時の祈り』での病の霊的解釈とダンの復活観は、姿勢に関わる形で次のようにまとめられる。まず直立の体勢は、頭と魂を天に近づけるといって、墮罪以前からの人間の生来の特権だ。そのため、病で横たわる状態は、第一義的には、身体と魂の双方で、特権を奪われた人間の罪深さのしるしである。しかし、身体が死人のように横たえられることを、神から与えられた辱めとして受け入れることで、人間は謙虚さを獲得する。回復時には、横たわる経験に裏打ちされた魂の「謙虚さ」を以って、再び直立して天を観想し、復活の救いを得るのだ。1634 年版『危篤時の祈り』の表紙絵が、屍衣を纏い「横たわる」ダンの「立」像であること (Paterson 6) は、本書のメッセージを視覚的に伝える、当を得た意匠だといえる。

【参照文献】

- Clement, Jennifer. *Reading Humility in Early Modern England*. 2015. Routledge, 2019.
- Donne, John. *Devotions upon Emergent Occasions*. Edited by Anthony Raspa, McGill-Queen's UP, 1975.
- Frost, Kate Gartner. *Holy Delight: Typology, Numerology, and Autobiography in Donne's Devotions Upon Emergent Occasions*. Princeton UP, 1990.
- McDuffie, Felecia Wright. *To Our Bodies Turn We Then: Body as Word and Sacrament in the Works of John Donne*. Continuum, 2005.
- Peterson, Richard S. “New Evidence on Donne’s Monument: I.” *John Donne Journal*, vol. 20, 2001, pp. 1–51.
- Pender, Stephen. “Essaying the Body: Donne, Affliction, and Medicine.” *John Donne’s Professional Lives*, edited by David Colclough, D. S. Brewer, 2003, pp. 215–48.
- 岡田宏子「ジョン・ダンの復活—*Devotions* を中心に—」, 『英文学研究』, 50 巻, 1 号, 1973, pp. 15–28.
- 竹永雄二「ジョン・ダンの復活のヴィジョン」, 『愛媛大学教育学部紀要』, 第 60 巻, 2013, pp. 235–42.